

## Translations and Notes on "Chang sheng dian (長生殿)" (2)

竹村, 則行  
九州大学文学部 : 教授 : 中国文学

<https://doi.org/10.15017/9649>

---

出版情報 : 中国文学論集. 27, pp.98-115, 1998-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :



## 『長生殿』訳注(二)

竹 村 則 行

### 凡 例

- 一 『長生殿』本文の底本には、現在最も流布している徐朔方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本(劉世珩『彙刻伝劇』所収)を始め、次の第二項に掲げる諸書も随時参照した。
- 二 本訳注に当って、出典の確認や本文の解釈等において、以下の諸書を参照したが、訳注の際には、これを一々明示してはいない。
  - 塩谷温『国訳長生殿』(『国訳漢文大成』所収、一九三三年)
  - 徐朔方校注『長生殿』(人民文学出版社、一九五八年)
  - 曾永義『中国古典戲劇選注』所収『長生殿』(国家出版社、一九七四年)
  - 蔡運長『長生殿通俗註釈』(雲南人民出版社、一九八七年)
- 三 本訳注では、主に前記参考書に於てなお未注の故事出拠について注出する事にした。全般的総合的な注については、康保成・竹村則行共著『長生殿箋注』(中州古籍出版社、近刊)を参照されたい。
- 四 「唱」の部分の訳出は、時にこの間に挟まれる短い科白や襯字をも含めて、♪♪の記号を用いて示した。また、演員の扮装や動作、及び唱や動作の主体を示すト書きの部分は、原文の体裁を襲って小字で示した。
- 五 訳語のうち、原文の「介」「科」(しぐさ)は、一種の術語として、そのまま「介」「科」として訳出した。

六 訳文は、「唱」の部分の訳出においても莊重な韻文の形式を敢えて採らず、意味内容の解釈を重視しつつ、努めて平易な日本文となる様に留意した。「唱」部分の韻文訳出は今後の課題とする。それでも訳者の誤解や力不足による生硬な訳文を免れなかったかも知れない。諸賢の忌憚ない御指教をお願いする次第である。

七 本訳注(二) (第四〜七齣)は、一九九五年十二月〜九六年七月に行われた九州大学大学院の演習資料を基にして、担当の竹村が浄書した。この間の演習に参加した助手・院生・研究生は次の通りである。

静永健・岡村真寿美・若杉邦子・正木佐枝子・諸田龍美・胡山林・野田雄史  
黄冬柏・呉紅華・角田美和・王展・蕭燕婉・王毓雯・垣見美樹香

#### 第四齣 春 睡

【越調 引子】 【祝英台近】 (旦が、永新に扮した老旦と念奴に扮した貼旦を連れて登場) 夢から醒めれば、春たけなわ、髪を梳くのもけだるいほど。化粧台に向おうとして、生来の美肌が脂粉に汚されるのが厭ましい。(老旦・貼旦) 春日が窓辺に射し込み、カーテンが微風にそよぐ時に、私どもは香をくゆらせ、静かに坐して楽しみます。♪

永新、念奴が叩頭してご挨拶します。(旦) お起ちなさい。【海棠春】 「窓の外に鶯が美しく囀り、眠り足りないこの私を目覚めさせる。(老旦) かわせみ模様の布団は明け方の寒さにふんわり暖かく、(貼) 香炉から沈香の煙りがゆらゆら立ち昇る。(旦) 昨夜の酔いがまだ醒めぬのに宮女が告げ知らせる。(老旦・貼) 別院での笙歌の会が早に始まっています」と。(旦) ちと尋ねるが、海棠の花は、(合唱) 昨夜のうちにどれほど咲いただらうか。」(旦) 私は楊氏、弘農の人でございます。父親は楊玄琰と申しまして、蜀中司戸の官にありました。私は早く身寄りを失くし、叔父の家で育てられました。生まれつき左臂に環状のアザがあり、「太真」の二字に読めました。そこで玉環と名づけられ、幼名を太真と申します。性格は温和で柔順、艶やかで美しい容姿でございます。絹の袖で涙を拭けば、流れる涙は紅い氷の玉になって滴り、綾絹を身に纏えば、香り高い玉の様

『長生殿』訳注(二) (竹村)

な汗が流れ落ちます。この私は天恩を蒙り、数多の宮女中から抜擢されて、貴妃の位を授かり、皇后に等しい待遇を受けることとなりました。兄の楊国忠は右相の位を拝し、三人の姉もみな国夫人に封ぜられて、楊氏一門は栄華を極めていきます。昨夜、私は西宮にて御寝に侍り、（声を低める介）やむなく雲雨の契りを結ぶに至り、それで今日は昼時分になってやっと起き出した次第。（老旦・貼）鏡台の準備ができました。貴妃様、どうかお化粧を。（旦が行く介）「櫺窓から射し込む朝日に珠の簾が照り映える中、鏡に映る姿に紅粉をつけて、お化粧を凝らす。」

【越調】 【祝英台】（坐って鏡に向う介） ♪鬢を軽くかき上げ、鬢を整え、鏡に向って頻りに斜めに見る。（老旦）貴妃様、この花鈿をお付け下さい。（旦）翡翠の花鈿を付け、（貼）更にこの麝脂をおさし下さい。（旦）紅脂をさし、

（老旦）貴妃様、眉をお描き下さい。（旦が眉を描く介）心をこめて、更に両の蛾眉を描く。（旦が立ち上がる介）ゆっくりと、この楊柳の細腰を支える。（貼）あら、貴妃様、花を挿すのを忘れしました。（旦に代って花を挿す介）うまく桜桃の花をあしらい、（老旦・貼が見つめる介をする）このたおやかな艶姿を見ると、風に弾き飛ばされなしかと気をもむ。

↓（老旦・貼）貴妃様、お召し替え下さい。（旦を着替えさせる介）

【前腔】 【換頭】 ♪麝香や蘭香が漂う中、黄金の刺繍の衣服から杏模様の上衣に着替える。（旦が歩く介）（老旦・貼が見つめる介）ほら、步搖が小さくふるえ、湘裙が軽く挙がり、（旦が靴をはく介）身をかためて弓なりに反った靴を履けば、足にびったり合う。（旦が自らの容姿を顧みる介）（老旦・貼）ゆるやかに風に吹かれて、得も言えぬなまめかしさ。（旦が振り返り、鏡を見る介）（老旦・貼）鏡を振り返れば、この上なくあでやかで美しい。（旦がだるそうに欠伸をする介）（老旦・貼が見つめる介）貴妃様、こんなにお疲れでしたら、もう一度お休みになられては如何でしょう？ ↓

（旦）そうね、身体がだるいので、少し休みましょう。永新、念奴、カーテンをおろしてちょうだい。まったく「春景色はわけもなく人を眠りに誘う、起きて髪を梳いたばかりなのに、もう眠い」だわ。（眠る介）（老旦・貼がカーテンを下ろす介）（老旦）天子様はまだこちらにいらっしやいませんが、もしや梅妃様のところに行かれたのでは？（貼）永新姐さん、まだ知らなかったの？ 梅妃様は上陽宮の東楼に遷されたのですよ。（老旦）えっ、そうだったの。（貼）永新姐さん、ここ数日、天子様は楊貴妃様だけを寵愛され、内侍もお連れにならず、不

意に西宮にいらっしやるので、私たち十分用心してお仕えしましょう。(生が歩いて登場)

【前腔】【換頭】♪何とも嬉しい、後宮に新たに美女を得て、一日に何度も愛撫できるとは！♪(生が前に進み、老旦・貼が見える介)天子様いらっしやいませ。貴妃様は休まれたばかりです。(生)では起きぬ様に。(カーテンを掲げる介)♪カーテンをゆっくり開ければ、龍腦がほのかに香り、美人の香りに相和して漂う。見れば、その紅玉の様な可愛い顔が鴛鴦の布団にくるまって寝ている姿が何とも愛くるしい。(老旦・貼が顔をむける介)こんなに優しくされ、貴妃様がどうして天籠を独り占めしないでおれましょう。♪

【前腔】【換頭】(旦が驚いて目覚め、低い声で)♪どなた？急にカーテンをめくられ、眼をこすって見てみれば、(起き上がって坐し、眼をこすり、髪をかきあげる介をする)(生)既にお化粧を落し、唇の紅は消え、梳いた髪も傾いている。(老旦・貼が旦を助け起し、旦は眼を開けて又閉じ、立っては又坐りこむ介をする)(生)愛いものよ。侍女が腰を支えれば、彼女はなよなよとして立つことも坐ることもままならぬ。(老旦・貼が旦を助けて坐らせる介)(生が支え止める介)こんなに朦朧としているのなら、しばらく休養したらどうだ。♪

(旦)天子様。(生)晴れた春の昼下がり、まことに行楽日和なのに、そなたはどうして昼まで寝ておるのか。(旦がうつむく介)昨夜、天子様のあつい御恩寵を承けまして、花の小枝も手折れる程でした。今朝方、強いて起きて髪を梳きましたが、また朦朧として眠ってしまい、天子様のお出迎えに失礼を致しました。(生が笑う介)そうであれば、朕の方が唐突であった。(旦が羞じて物言わぬ介)(生)貴妃よ、そなたは疲れている様だが、前殿へ行つて、しばらく共に気晴らしをしようか。(旦)かしこまりました。(生と旦が同行し、老旦と貼が随行する介)(生)「落日が西王母(楊貴妃)を引き留め」、(旦)「そよ風に衛少兒(秦・虢・韓三国夫人)が寄り添う」。(老旦・貼合唱)「宮中の行楽の秘め事は、宮殿外の人にはほとんど知られない」。(生と旦がくると回って坐る介)(丑が登場)「奥深い宮殿は昼の時刻も聞こえぬ程であり、高閣から人が用事を告げに来る。天子の喜びは近臣のみがこれを窺い知る」天子様に申し上げます。国舅の楊丞相殿が詔旨によって安祿山を試験し、ただいま宮門外で上奏を待っております。(生)上奏に参れ。(丑が詔を伝える介)楊丞相殿、天子様のお召しです。(副浄が登場)「天下の上奏文が院を通して御前に上げられ、宮中の笑い声が牆壁を隔てて聞えて来る」。(拝して見える介)臣楊国忠、



元・應居仁「題歐陽氏楊妃春睡圖」

明・田登「楊妃春睡圖」

明・謝賁「楊妃春睡圖」

明・徐渭「楊妃春睡圖」

これらの圖畫は恐らく現存はしていないものの、これらの題畫詩に描かれる世界は本齋「春睡」と相共通するものであり、本齋の淵源がこれらの元明の題畫詩にあったと考えることも可能である。

(2) 原文「生有玉環、在於左臂、上隱、太眞、二字」：明・陶宗儀編一百二十号『說郛』の号一百十一「長恨歌伝」に附載する唐・元虚子「楊太眞説」に「楊太眞生而有玉環在其左臂、環上有墳起太眞二小字、故小名玉環。」とある。

『唐代叢書』所収「長恨歌伝」及び『馬嵬志』卷八所引の『龍威秘書』本も同じ。されば、洪昇はこれら明清の叢書類に載録される元虚子「楊太眞説」に沿って、この部分の描写をしたものと思われる。

(3) 花鈿：花子とも。中国古代の婦女が額の眉間に付けた、金箔や雲母・翡翠等で作った飾り物。唐代の婦女子間に流行した。この場合は、続いて「貼了翠鈿」とあることから、翡翠を用いた翠鈿をいう。花釵をいう「花鈿」とは別物である。周汛・高春明『中国衣冠服飾大辞典』（上海辞書出版社、一九九六年）三八三頁、四〇一頁参照。

(4) 原文「紅玉一團」：清・胡鳳丹『馬嵬志』卷十三所収、明・徐渭「楊妃春睡圖」に「一團紅玉沈秋水」とある。

(5) 原文「掠削鬢兒欲挫」：元稹「連昌宮詞」に「春嬌滿眼睡紅綃、掠削雲鬢旋裝束」とある。

(6) 原文「(丑) 啓萬歲爺、沈香亭牡丹盛開、請萬歲爺同娘賞玩。(生) 今日對妃子、賞名花。高力士、可宜翰林李白、到沈香亭上、立草新詞供奉。」：玄宗と楊貴妃の沈香亭での牡丹觀賞と李白の「清平調詞」供奉の故事は、早くは唐・韋濬「松窗録」（≡李濬「摭異記」）に見えるのを『太平広記』卷二〇四に転載する。また、宋・樂史「李翰林別集序」にも同様の故事を述べるのを、樂史「楊太眞外傳」卷上（通行本）にも載せるが、宋代の原本と思われる「楊妃外傳」（『說郛』涵芬樓一百卷本卷七）にはこの故事を載せないで、明代以降の通行本（『說郛』一百二十卷本・『顧氏文房小説』等）に見えるこの故事は、通行本の印刻時に補加された可能性が高い。

次に、ここで問題となるのは、今日の『長生殿』が完成するまでに三度の改稿を経た過程におけるこの故事の問題である。即ち、『長生殿』例言によれば、『長生殿』は『沈香亭』と『舞霓裳』と『長生殿』という様に、「十餘年を経て、三たび稿を易へて始めて成」った。これらの前二稿の原稿はもはや佚したと思われるが、題名から察する限

り、『舞霓裳』劇とは楊貴妃の霓裳羽衣舞の故事を中心としたものであり、今日の『長生殿』第十一「聞樂」齣、第十二「製譜」齣、第十四「偷曲」齣、第十六「舞盤」齣等の淵源であるだろう。また『沈香亭』劇とは、ここに述べた沈香亭での牡丹観賞と李白の清平調詞の故事を敷衍したものとと思われるが、今日の『長生殿』においては、本第四「春睡」齣において玄宗楊貴妃の牡丹観賞の徳愆がなされて以後、その実況の描写は無く、やがて第二十四「驚變」齣の「南泣顔回」詞において牡丹花観賞の故事が回顧されるのみである。

初稿の『沈香亭』を改編した理由について、『長生殿』例言では、友人の毛玉斯が「排場近熟」（沈香亭の場面は熟知されている）と言ったからだとしているが、ここに挙げた第四「春睡」齣及び第二十四「驚變」齣の描写は、その失われた『沈香亭』劇を偲ぶすがと考える事ができる。更に、この部分の呉山眉批に「清平調は只だ白中に於て帶過するは、亦た是れ熟處を避くるなり。且つ、後の『驚變』折中に於て調文に補寫するは、更に生色あるを覺ゆ」とあるのも、この間の事情を物語るものである。

## 第五齣 稞遊

【雙調引子】【賀聖朝】（丑が登場）♪私は宮中奥向きの最高位にあり、天顔を朝夕となく拝し奉る。身には真新しい金貂や玉帶、更には蟒袍衣をまとい、宮殿の出入りも殊の外に覚えめたい。↓

我が輩は高力士である。官は驃騎將軍を拝し、職は六宮を統括し、権力は百官を圧倒する。機をうかがつて事を丸く収め、天意を推し測り、心を込めて天子にお仕えするので、深い天恩に浴している。今日は三月三日、天子様は貴妃様と曲江に遊幸されるので、私に楊丞相及び秦・韓・虢三国夫人と共に随行するように命じられた。では、行って彼らに詔旨を伝えよう。「天子の詔命を外戚へ伝える。今日、天子様は長楊宮（曲江）へ行幸されるので随行する様にと。」（退場）

【前腔】（浄が衣冠束帯し、従者を連れて登場）♪有力筋に請託して以来、天恩が再び甦った。虜囚の臣が今や親近の臣



となり、我が壯志も必ずや遂げられよう。↓

俺は安祿山、天恩に浴して復官して以来、天子の覚えもめでたい。俺の生来の大きな腹は膝先まで競り出しているが、ある日、天子はこれを御覽になり、笑って「この中に何が有るのか」と下問された。俺はすぐに「ただ赤心のみでございます」と申し上げると、天子は大いに喜ばれ、以後ますます親任があつくなり、やがてこの俺を諸王に封ずると約束された。何とも破格の厚遇ではないか。左右の者、控えおろ。(従者が応じて退場)(浄)  
今日は三月三日、天子は貴妃と曲江に行幸され、三国夫人も随行するので、国中の男女がこぞって見にゆく。俺も便服に着替え、単騎で乗り込み、遊んでこよう。(衣服を着替え、馬に乗って行く介)門を出れば、路には香塵が満ち、車馬が雲集して、何と賑やかなこと。まことに「道にいつばいの柳絮が酔客に纏わりつき、花影で啼く鳥が道行く人を呼ぶ」といった風情だ。(退場)(副浄と外が王孫に扮し、末が公子に扮し、それぞれ着飾って一緒に登場)

(合唱)

【仙呂入】

【夜行船序】

♪春景色に心は浮き立つ。花に吹く風が扇で煽った様にそよぎ、柳の若芽が一斉に芽吹

くのが愛おしい。行き進めば、都大路と見まがう程に紅塵が舞い上がっている。↓(会う介)よろこそ。(副浄・外)  
今日は修禊の日、私達も曲江まで御一緒しましょう。(末・小生)そうしましょう。あちらの車列の一団は、きつと三国夫人がいらっしやったのでしょうか。早く行ってみましょう。(行く介)♪車の幕や軒はキラキラと輝き、真珠や翡翠で彩られ、目を奪う鮮やかさ。蘭や麝の香りが風に乗って馥郁と香り、三国夫人の衣服や佩玉が遠目にも見分けられる。↓(共に退場)(老旦が繡衣を着て韓国夫人に扮し、貼が白衣を着て虢国夫人に扮し、雑が緋衣を着て秦国夫人に扮し、下男や下女を連れ、それぞれ車に乗って登場)(合唱)

【前腔】

【換頭】

♪ゆったりと、綾絹が雲の様にごめく。三夫人は妖艶さを競い、それぞれに黛や髪を飾る。我

らは天寵を蒙り、特別に曲江への同行を許された者。↓(老旦)私は韓国夫人、(貼)私は虢国夫人、(雑)私は秦国夫人、(合唱)天子の仰せに従って曲江に遊幸に参りました。下男よ、車を前に進めなさい。(下男)分りました。(行く介)(合唱)♪赤い車輪が若草の土堤にきしみ、道に投げた耳飾りや簪が落花に混じる。光栄にも我ら天子の外戚は行幸につき従い、幾組もの宮女が進みゆく。↓(共に退場)

【黒蜘蛛序】【換頭】（浄が馬に鞭打って登場し、三国夫人の退場を目で追う介）何ときれいな。♪ちらと見れば絶世の美貌、急に見られれば魂も消える程だ。だが相手は車中、俺は馬上にあつて、近づけぬのが恨めしい。♪俺は安禄山、曲江に行きしな、折よく三国夫人に出会つたが、それぞれに絶世の美貌である。ああ、唐の天子よ、あなたは貴妃を手に入れた上に、更にこれらの夫人を加えるとは、何と風流な色好みではないか。♪いわば、花のような多くの美女が一人のものになり、初めて天子の尊さがわかるというもの。♪俺はまず前に行つて三人を飽くまで見てやる。♪前方の三夫人の車の土埃りに、貪欲な眼もうつろ。さても鞭をしきりに打つて追いかけん。♪

（浄が馬に鞭打つて前に駆けると、雑が従者に扮して登場し、遮る介）こらつ、丞相様が居られるのに、こんなに騒ぐのは何という奴だ。（副浄が馬に乗って登場）何を騒いでおる？（浄が副浄と顔を会わせる介、浄は馬を返して急ぎ退場（従者）今しがた、一人の者が馬に乗つて突進して来ましたので、前に出て止めたのです。（副浄が笑う介）向うに行つたのは安禄山だ。どうして小生を見ると急いで逃げたのだろう？。（考えこむ介）三国夫人の車はどこだ？（従者）前方です。（副浄）やあ、安禄山の奴め、何と無礼な。

【前腔】【換頭】♪忌々しいことに、彼奴（安禄山）は皇帝の外戚を軽視し、三国夫人の香車に近づいて無礼をはたらく。俺は急に怒りがこみ上げ、どうにも収まらない。♪者ども、三国夫人の車にびったり随行し、無用の者を退けるのだ。（衆が応じて前に行く介）（副浄）♪急いで駆け、鞭打つて道を開き、飾り立てた馬に乗つて、三国夫人の香車を追う。（合唱）通行人に告ぐ、決して香車に近づいてはならぬ。近づけば丞相殿の怒りを買おうぞ。♪（共に退場）

【锦衣香】（浄が村婦に扮し、丑が醜女に扮し、老旦が花売りに扮し、小生が若旦那に扮し、歩いて登場）（合唱）♪お化粧をして、脂粉をつける。身なりは野暮で、風采は上がらぬ。更に憐れなのは、裾が春草に濡れ、野の花を髪に挿した風体。♪（会う介）（浄）皆さんは曲江に遊びに行くのですか？（衆）そうですよ。今日は皇帝様も貴妃様もそこに行かれるので、我々も見にゆくのです。（丑）皇帝様は貴妃様を宝物の様に愛されるようですが、貴妃様は私と見てくれがどう違うのでしょうか？（老旦が笑う介）（小生が丑を見つめる介）（丑）あんた、どうして私ばかり見つめるの？（小生）私が見るに、お姉さんの顔には、幾つも宝物があります。（浄）どんな宝物？（小生）ほら、眼には猫目石を嵌め、額に

は瑪瑙模様の皺、齒は蜜蠟の様に並び、唇は珊瑚の様に美しい。(浄が笑う介) (丑が扇子で小生を打つ介) からかわないですよ。あいにく、あなたには宝が無いわね。(小生) どういう事よ。(丑) あなたのお尻は銀山の様で、いったい何人のオカマを掘ったことか。(浄が笑う介) 冗談はよしてよ。三国夫人の車が行き過ぎた後は、道に物が落ちていそうだから、急いで行ってみましよう。(丑) そんなら早く行きましよう。(行く介) (丑がしなを作って小生とぶざける介)

(合唱) ♪そよ風が吹いて雲を吹き払う。三国夫人の香車が行き過ぎた後に、草木は春のように甦る。♪ (小生) この草むらを探してみよう。何か有るかしら。(老旦) 私は先に行くよ。♪朱門や楼閣に向って、花売りの声は何度もひびく。♪ (花はいらんかねーと叫んで退場) (皆が探し物をして、それぞれ拾う介) (丑が浄に問う介) あなたは何を拾ったの？(浄) 簪よ。(丑が見つめる介) これは金製で、上に深紅の宝石が付いている。何という幸運！(浄が丑に問う介) あなたは？(丑) 鳳凰の刺繍のある靴の片方よ。(浄) いいわね、じゃ履いてみたらどう？(丑が足を伸ばして比べる介) ちえっ、足指の一本も入らん。靴先のこの真珠は取つときましよう。(真珠を取り、靴を抛り投げる介) (小生) 靴は私がもらつときます。(丑) あんたときたら、拾い物上手ね。あなたの拾い物も出して見せてよ。(小生) これは鮫納のハシカチで、金の小箱を包んでいます。(浄が受取り、開けてみる介) おや、黒いのやら黄色いのやらの薄いかけらだわ。嗅ぐといい香り、媚薬じゃないかしら。(小生が笑う介) お茶でしょう。(丑) ちよつと嘗めさせて。(浄も張り合つて嘗め、各々吐く介) ペっ、苦いわ、こんなもの嘗めてどうするの？(小生がしまう介) もういい、みんな先に行きましよう。

(行く介) (合唱) ♪蜂や蝶が乱れ飛び、柳や花が人を誘う。見やれば龍楼が水辺に逆さに映っているが、曲江も程近いであらう。♪

(小生と浄が先に退場、丑が繋ぎの演技をして呼ぶ介) あんた達、待つてよ。ありや、おしっこしたくなつちやつた。じゃ、ここに砂の穴を作つてゆこう。(退場) (老旦・貼・雑が下男や女中を連れて登場)

【漿水令】 ♪衣服の香りにまじつて花の香が漂い、鶯の声にまじつて人の笑い声が微かに聞える。見れば楊柳の花が雪のように降つて白い浮草を覆い、一つがいの青い鳥が赤いハンカチを銜えたり落したりしている。すばらしい春景色は仲春を過ぎた頃、うららかな日射しが車の進みを促す。♪ (下男) 夫人に申し上げます。曲江に着きました。(老旦) 丞相殿はどちらに？(下男) 天子様が望春宮におられるので、丞相殿は先にそちらに行かれました。

(老旦・雑・貼が車を下りる介) 見て、本当にすばらしい景色だわ! ♪曲江の岸をめぐり、曲江の岸をめぐり、花々の紅や樹々の緑が色とりどり。曲江に臨み、曲江に臨み、柳や蒲の新芽が萌える。♪

(丑が小内侍を連れ、馬を控えて登場) 「天子の勅命を美しく飾った桃花の名馬に乗って伝える。馬上に乗るは金蝶模様をあしらった裙子の使者。」(会う介) 天子の口勅にございます。韓国・秦国の二夫人は別殿にて御宴を賜り、虢国夫人は直ちに馬に乗って宮中に入り、楊貴妃様に陪席して御宴に侍るように。(老旦・雑・貼が跪く介) かしこまりました。(起つ介) (丑が貼に向う介) どうか御夫人にはすぐさま御乗馬下さい。(貼)

【尾声】 ♪宮内官よ、何をそんなにせかす。♪姉よ妹よ、♪あなた方をさしおき、私一人が春風を受けて天子に親近する事になりました。♪ (老旦・雑) なるほど ♪あなた虢国夫人は薄化粧で天子の御前にまかり出る程のことはある。♪

(貼が馬に乗り、丑が引いて退場) (雑) ほら、裴の姐(う)さんはとうとう鞭を振るって行っちゃいました。(老旦) まあ、好きにさせましょう。(女中) 二夫人にはどうか別殿の御宴において下さい。

禊堂には赤い桃の花や緑の柳の青葉が映え、 沈佺期

(老旦) 共にする楽しい遊びに、万事が風流である。 張 諤

(雑) 願わくは天子の飲びの尽きせぬことを、 武平一

(合) うらかな春風に、美女が艶やかに微笑えむ。 杜 牧

注

(1) 原文「今乃三月三日、萬歳爺與貴妃娘娘遊幸曲江、命咱楊丞相並秦、韓、虢三國夫人一同隨駕。」：『舊・新唐書』楊貴妃伝や『資治通鑑』卷二一六、また「楊太真外傳」等には、楊貴妃一族の華清宮遊幸の艶麗な貌は描写するが、本齣の様な曲江遊幸の記事は載せない。恐らく作者は、杜甫「麗人行」に見える曲江行幸の記録に、これら一連の華

清宮行幸の記事を合わせて本齣を描写したものであろう。

(2) 原文「所喜俺生的一個大肚皮、唯有一片赤心。」…唐・鄭繁『開天傳信記』に、「祿山豊肥大腹、上嘗問曰；『此胡腹中何物、其大如是？』、祿山尋聲應曰；『腹中更無他物、唯赤心爾。』」と。『舊・新唐書』安祿山傳、及び『資治通鑑』卷二一五、天寶六載條はほ同じ。また『梧桐雨』楔子にも同様の記事がある。

(3) 原文「遺珥墜簪」…「楊太真外傳」卷下に「遺珥、墜寫、琴瑟、珠翠、燦於路岐、可掬。」と。『舊・新唐書』楊貴妃傳もほ同じ。

(4) 原文「裴家姐姐」…號国夫人を指す。韓国夫人は崔氏、秦国夫人は柳氏に嫁した。『資治通鑑』卷二一六、天寶七載條に「十一月、癸未、以貴妃姊適崔氏者爲韓國夫人、適裴氏者爲虢國夫人、適柳氏者爲秦國夫人。」とある。

## 第六齣 傍評

【中呂過曲】【縷縷金】（丑が登場）♪宴遊がやみ、天子が帰って来られた。西宮の貴妃様が何故か天子の悩みとなっている。大方は春の曲江の宴遊での色恋のもつれであろうが、どうして飲菜が急に白けたのか、全く不思議だ、全く不思議だ。♪

先日、天子様は楊貴妃様と共に曲江に遊幸され、とてもお喜びでした。それが思いがけぬことに、昨日貴妃様が突然先に宮殿に戻ってしまわれ、天子様は今日やっと帰られました。極めてご機嫌斜めです。一体どうしたのでしょうか？ 向うから永新姐さんがやって来たので、聞いて見ましょう。（老旦が登場）

【前腔】♪後宮の事は予想もつかぬ。雲が出たかと思えば雨になったりして、陽台の天氣が急変する。♪（丑が会う介）永新姐さん、丁度良い所に来た。お尋ねするが、天子はどうして貴妃様の御殿にいらっしやらないのですか？（老旦）おや、高さん、まだ知らなかったの？♪お二人は参・商星の様に仲違いをして、今も意地を張っていらっしやるんです。♪（丑）何故ですか？（老旦）♪二つ並んで咲いた蓮花の傍に、もう一つの花が咲いたか

『長生殿』訳注（二）（竹村）

らです。(丑) どんな花ですか？(老旦が笑う介) 高さん、♪ 聡明な人なら自ずと分るでしょう。聡明な人なら自ずと分るでしょう。♪

(丑が笑う介) 私にどうして分りました。永新姐さん、どうか教えて下さい。(老旦) この事は、もとはと言えば貴妃様が惹き起こされたのです。(丑) どうしてです？(老旦) 実は貴妃様があの虢国夫人を、

【別銀灯】 ♪ いつもは天子の御前で賞めそやしていた。その薄化粧や転生の美貌は比べるものがないと。♪ ところがあの日、望春宮で天子にお願ひして虢国夫人を御宴に侍らせたところ、酒杯を重ねた後、♪ 天子様は虢国夫人と密かに親密になり、恋の同心帯を結ばれたのです。♪ (丑が拍手して笑う介) おや、私もあやしいと思つたよ。で、貴妃様はどうして悩んでおられるの？(老旦) その後、貴妃様は天子の恩寵が奪われるのを恐れて疑ひ深くなり、それで天子の貴妃様への恩情が急に冷め、鴛鴦を追い散らす様に貴妃様を追い払われたのです。

(丑) なるほど、虢国夫人は望春宮で貴妃様から何か言われて帰つて行ったのですね。(老旦) そうです。虢国夫人が帰られる時、貴妃様はお引き留めになりませんでした。それで天子はたいそう不愉快になられ、今日は竟に西宮にお見えにならず、貴妃様はただ泣かれるばかりです。(丑) 私が思うに、楊貴妃様は、

【前腔】 ♪ 可愛らしくはあつても、もともとときつい性格です。♪ 以前には梅妃様に迫つて ♪ 上陽東宮に遷して何も出来ぬ様にしましたし、♪ 今度はこの虢国夫人、自分の妹ですが、♪ 同じく姉妹であっても天子の愛情は別だと知らねばならないのに、どうして貴妃様にはこの事が少しもお分りにならないのか。♪ (老旦) この話はこれ以上はしないことにしましょう。ただ、天子は以前は貴妃様といつも御一緒だったのに、今は御二人とも顔も合わせられない。一体どうしたら良いでしょう？(丑) ♪ 私どもがどう塩梅の仕様がありません。しばらくあなたと傍から見ましよう。♪

(内から) 高さんにお召しです。(丑) すぐ参ります。

いつもの宴会が臨春閣で昼日中まで開かれ、

(老旦) 恩寵が深くて、その恩寵が先に衰えるのを恐れる。

韓 偓  
羅 虬

(丑) 外面では笑いながらも、心中は嫉妬で一杯、  
(老旦) その心理のあやを他人に聞いても、どうして分るものか。 陸亀蒙  
崔 顥

## 注

- (1) 原文「並頭蓮」：『西廂記』「崔鶯鶯夜聽琴」に「自古云、地生連理木、水出並頭蓮」と。  
(2) 原文「同心羅帶」：隋煬帝の宣華夫人陳氏の故事を指す。『隋書』卷三十六、宣華夫人傳に「見合中有同心結數枚」と。  
(3) 原文「前時逼得個梅娘娘、直遷置樓東無奈」：南宋・闕名「梅妃傳」に「後竟爲楊氏遷於上陽東宮」と。『長生殿』第四「春睡」齣にも「梅娘娘已遷置上陽樓東了。」とある。  
(4) 原文「連枝同氣」：『千字文』に「孔懷兄弟、同氣連枝」と。

## 第七齣 倅 恩

【商調】 【逸池遊】 (貼が登場) ♪私は瑤池(曲江池)の宴會に陪席したところ、思いもよらず天寵を承ることになった。よもや宮中の青い鳥にからかわれているのでは。よくよく考えれば、この間、天子への恋情はどうしようもないが、これでは世間に悪い噂が立って、この虢国夫人を許しはしないでしょう。♪

「宮中の燕が雪の様に白い腹を見せてひらりと舞い、宮殿の杏の梁にこっそり止まって、天子と影が二つ寄り添う。楊貴妃や虢国夫人の姉妹はあの趙飛燕や趙昭儀姉妹のように嫉妬深いのだから、その楊貴妃の住む昭陽殿へはゆめ近付くまいぞ。」私は楊氏、幼くして裴氏に嫁ぎましたが、不幸にして夫に先立たれ、卓文君の様に寡婦になりましたが、深閨を守っております。晋の韓寿に密かに香を贈って情を通じた女の真似が私にでき

『長生殿』 訳注(二) (竹村)

ましようか。今は妹の楊玉環の天寵のおかげで虢国夫人の封号を承っています。私は富貴の身分ではあつても厚化粧は好まず、絶世の美貌を誇りにして、天子様の御前にも敢て素面で罷り出る事にしています。先日、思ひもかけず曲江の行幸に陪従を命じられ、他の姉妹は外で宴席を賜つたのに、私一人だけが望春宮で御宴に侍る事になりました。そして遂にやむなく天子様の恩愛を承る仕儀に至つたのです。天子の御情愛は篤いのです、他人の噂が憚られます。昨日も天子は私を大内宮へ召されましたが、再三再四言葉をつくして御辞退申し上げて帰りました。よくよく考えれば、私は全くの果報者です。

【商調】  
【過曲】  
【字字錦】  
♪天恩がかくも深いのは前世の因縁であろうか。黄金の籠が美しい花の下に開き、天子様が言葉巧みに中の鳳凰を誘い出される。燭火が赤く燃える中、杯が何度も行き交う。杯が行き交う中、陛下が急に私に囁き声。あたふたと、有無を言わず、私をベッドに招き入れられる。思うだにベッドの中は夢心地の歓楽。情愛こまやかに二つの心が一つになる。情愛こまやかに二つの心が密かに一つになる。ところが朝になれば、影で噂を立てる人がいる。噂を立てる人は勿体ぶり、あれやこれやとトゲ刺す言葉。私の方は恥しいやら恐ろしいやら、ただ世間の噂の弄ぶに任せるのみ。♪

【不是路】  
（末が下男に扮し、副浄が下女に扮して、密かに登場（老旦が、外扮する下男と丑扮する下女を連れて登場）  
♪春風が吹き渡る中、外戚の住まう宮殿の花がとりわけ美しい。♪ 先日は妹の裴氏（虢国夫人）が一人天恩に浴しました。私は妹の柳氏（秦国夫人）と約して一緒に様子を見にゆくはずでしたが、思わぬことに柳氏は怒って病気になったので、私一人で行く事にしましょう。（外）申し上げます。虢国夫人邸に着きました。（老旦）知らせに行きなさい。（外が知らせる介（末が伝える介） 韓国夫人がお着きです。（貼）中に入ってもらいなさい。（副浄が招く介）（外と末が密かに退場）

（貼が出て来て、老旦を迎え入れる介）（貼）お姉さん、ようこそ。（副浄と丑が舞台のおどけをして退場）（老旦）妹よ、おめでとら。（貼）何のおめでたですか？（老旦）  
♪格別の恩寵を受け、太陽の傍に赤い花が咲いたわね。♪（貼が羞じる介をする）姉さん、とんでもない話です。私は  
♪離宮に行つて、天子のお酌をしただけ。天子様の恩愛は宮殿の内外に全く平等ですよ。♪（老旦が笑う介）同じ恩賜の御宴であつても、宮殿外の宴はどうして宮殿内の宴に比べられましよう。♪元談はよしてよ。宮中では天子はあなた一人を大事にされるのに、他の誰が寵愛を共にできましよう。



(貼) 天恩を共にするのに何の難しいことがありません。

(老旦) あんたに尋ねるが、妹の楊玉環の宮中の様子は如何でした？

【満園春】(貼) ♪春の曲江はうららかな景色。私は望春宮の宴席に待るよう仰せつかりました。♪ 妹の楊玉環は、♪後でやって来て、天子に寄り添い、ますますかわいがられます。♪ (老旦) 天子様は玉環をどの様に寵愛されたのかしら？(貼) ♪春の宵、春の宵、二人は比目魚のようにぴったり和合し、誰がその雲雨の情の深さを知りましょう。♪ (老旦) まさか少しも分らない訳でもないでしょ？(貼) 妹の玉環は性格が気まままで我がままです。♪その胸中をうかがい、その心中を察するに、彼女は全く我がまま放題。我がまま気ままで、他人のあらを探し、好き勝手放題なのです。♪

(老旦) 玉環は幼い頃からこんな気性なのだから、妹よ、あなたはやはり彼女に忠告するのが良いわ。(貼) どうして忠告なんかできません。

【前腔】【換頭】(老旦) ♪貴妃は我がままな気性で、天生の美貌を誇っており、姉妹でも傍からあれこれ言えるものではありません。♪ まして近ごろ彼女は、♪昭陽殿において、昭陽殿において、一人で三千人の寵愛を独占しており、誰が彼女と勝敗を争えましょう？♪ (貼) 誰が彼女と争えましょう。ただ彼女はこんな性格だから、いつ陛下の心が変わるやら。(老旦)が立って、貼に背を向ける。妹の裴氏(虢国夫人)の言葉を聴くと、きつと何か訳がありそうだ。♪その胸中をうかがい、その意中を察するに、彼女(虢国夫人)はこんなに激しく怒っている。こんなに激しく怒っているのは、何か真相を隠そうとして隠しきれないのであって、きつと妹の裴氏(虢国夫人)には別の心づもりがあるのだろう。♪

(末が登場) 「思いがけず厳しい詔旨を聞き、堂前の夫人に伝えます。」(会う介) 夫人に申し上げます。大変です。貴妃様が天意に忤った為に、天子様が大層お怒りになり、高さんに命じて楊丞相府へ送り帰されました。(老旦が驚く介) そんな事が！(貼) 彼女のあの気性では、きつと一悶着起ると私が言った通りです。(老旦) そうであつても、私達は姉妹の情があり、これは楊一族の榮辱に関わる事ですから、どうしても様子を見に行かねばなりません。(貼) そうだわ。では一緒に参りましょう。(老旦)

【尾声】 ♪ 突然の敵しい譴責に心は戦く。おの（貼）香車を整え、事の吉凶を一緒に探りに行く。♪ お姉さん、妹の玉環はきつと梅妃にも笑われることでしょう！（合唱）それでも、♪ 怪しい梅の花が宮中に咲いている方がまだしもよ。♪

（貼）聞けば、宮中から詔勅が下され、

劉長卿

（老旦）（楊貴妃は）朱塗りの宮門を出されて、戟を立てた（楊国忠の）門に入るといふ。

賈島

（貼）天恩が永久に続くことがどうしてあろう、

喬知之

（老旦）哀れにも、一門の榮落が朝夕の短時に變化する。

李商隱

注

（1）原文「玉燕」：漢成帝の妃趙飛燕を指す。妹の趙合徳と共に成帝の寵愛を争った。ここは楊貴妃の姉虢国夫人に喩える。なお「燕」は「宴」に音通じ、歛棗、逸棗の意を含む。

（2）原文「杏梁」：杏で作った梁。「杏」は「幸」に音通じ、僂倖の意を含む。ここは、虢国夫人が天子の寵愛を受けた僂倖に喩える。

〔附記〕前稿『長生殿』訳注（一）（『中国文学論集』第二十六号）のうち、次の二点について訂正、又は補加する。

① 「自序」文の訳出について

原文「從來傳奇家非言情之文、不能壇場；而近乃子虛烏有、動寫情詞贈答、數見不鮮、兼乖典則。」部分の訳文を、

原訳「これまでも戯曲家は愛情を述べる文を得意としてきたが、近頃は誰もが情詞のやり取りを作品中に描

写するようになり、それが余りに度重なって、典則にも乖いている。」とある(二〇九頁)のを、  
新訳「これまでも戯曲家は情愛を述べる文でなければ能力を發揮することができなかったが、近ごろは有象  
無象の輩までもが、何かといえれば情詞のやり取りを描写するようになり、それが頻繁に重なって、守  
るべき法則にも悖るようになった。」にあらためる。

② 「例言」文中の注について

原文「姑蘇徐靈昭氏爲今之周郎」部分の「周郎」の語注について、

原訳「杭州の徐靈昭氏は今日の周瑜たる人物であつて」とある(一二二頁)のを、「周瑜」部分に新たに注を  
加え、

新注「或いは『中原音韻』を撰した元・周德清を指すとも考えられる(岩城秀夫氏指教による)。」とする。

(その場合は訳文の『周瑜』を『周德清』に変更する。)

※ 前稿の拙訳を丹念にお読み下さり、貴重な御賜教を賜った岩城秀夫先生に衷心から感謝します。